

## 「子宮ガン検診のすすめ」

医療法人青天会  
ひろた産婦人科クリニック  
廣田 和子

我が国では、昭和 30 年頃から、子宮ガン検診が実施されるようになり、その結果、早期発見・早期治療の子宮ガンが増え、子宮ガンで死亡する人が、着実に減少してきています。

しかしその反面、何となく気になる症状があるが、恥かしいからとか、忙しいからとか、悪い病気だったらどうしようなどと思い、不安なまま病院に行くのを先のばしにしている方も多いようです。

そこで少しでも漠然とした不安が取り除ければと、今回は、子宮ガン検診についてお話ししたいと思います。

子宮は入り口の頸部と呼ばれる部分と、奥の赤ちゃんを育てる体部と呼ばれる部分に分かれています。子宮の入り口にできた癌を子宮頸癌、体部にできた癌を子宮体癌といいます。一般的に「子宮ガン検診」と言われるものには、子宮頸部細胞診と子宮体部細胞診の 2 種類がありますが、このうち最も一般的に行われているのは、子宮頸部細胞診です。

子宮ガン検診を受けるにあたって、注意すべきことは特別何もありません。いつでも簡単に受けられます。ただ月経中や性器出血の多い時は避けた方が無難です。

検診に来られると、まず問診があります。問診では、今までにかかった病気や妊娠、出産経験について、また一番最近にあった生理が始まった日、生理の周期や病状などを伺いますので、事前にメモしておくといいでしょう。

次に内診室に入り、綿棒やヘラなどを使って子宮頸部の細胞をこすり取ります。痛みはほとんどありません。少し出血する場合がありますが、すぐ止まります。

体部ガン検診の時は、細い棒の先の小さなブラシで子宮の中の細胞をこさぎ取ります。少し痛みがあるかもしれませんが、すぐ済みます。その後内診などがあります。

検査を受けてから、1~2 週間で結果が出ます。

検査そのものは、以上のようにとても簡単です。そんな中、日頃の検診の中で気付いた事が 2~3 あるので、付け加えさせていただきます。

まず第一に、患者さんの中には、はじめの問診時には、何も心配な症状はないと話していても、内診台から降りたとたん、「ホッ」とされるのか、色々普段から気になっている症状を話される方がおられます。これでは折角の機会にガン検診しかできません。診察前にリラックスして、十分な情報を医者へ提供し、ガン検診だけでなく、必要十分な検査を受けられるようにして下さい。

第二に、閉経を迎えた 50 歳過ぎの方の受診が極端に少ないようです。閉経すれば産婦人科の病気とは縁が切れたと思われるのでしょうか。そんな事はありません。体癌をはじめ、高齢者に好発する膣癌・外陰癌もあります。閉経後も、1年に1回は癌検診を受けましょう。

第三に、受診者の多くが反復受診者で、初回者の比率が低いようで、全然検診を受けたことがない方が、まだまだたくさんおられるようです。

これを機会に、婦人科を身近なものに感じ、症状のないうちに、積極的に、1年に1回自分のお誕生日などに日を決めて、子宮癌検診を受けるようにされてみてはいかがでしょうか。